

明治以降の彫刻たどる

きょうから現代美術館 年代順に60点



明治から現代までの彫刻作品などが並ぶ「きっかけは『彫刻』。」展の会場＝熊本市中央区

澤治子さん(43)は「時代の雰囲気を感じながら、彫刻の概念の移り変わりも見えてほしい」と話している。

崇城大芸術学部学生らが作品を基にしたキヤクターのパネルも展示。21日14時には東京国立近代美術館の大谷省吾美術課長が講話する。(魚住有佳)

彫刻をテーマにした県内初の大規模展覧会

「きっかけは『彫刻』」

展が21日、熊本市中央区上通町の市現代美術館で開幕する。日本の彫刻と立体造形の発展を、明治期から現代まで年代順に60点でたどる。2019年度国立

美術館巡回展と市現代美術館コレクション展の同時開催。同館や熊

の同時開催。同館や熊

日など主催。11月24日まで。

20日、記者発表が同館であった。1918

(大正7)年頃作られた高村光太郎のブロンズ「手」は、仏の手を逆さにした形で緊張感と存在感を放つ。

昭和の作品では、島原の乱の舞台・原城跡を訪れた際のひらめきで創作したというクリ

スチャンの彫刻家・舟越保武の「原の城」が目を引く。前衛芸術家・赤瀬川原平の立体は肌着や義眼を寄せ集めて、人間の羞恥心などを呼び起こさせる。

市現代美術館の所蔵品は、コスチュームデザインナーのひびのこづえのドレスや、安本亀八の「相撲生人形」などが並ぶ。学芸員の富

富